

資治通鑑 第 188 卷

【唐紀四】 起屠維單閼十一月，盡重光大荒落二月，凡一年有奇。

■唐、●隋、突厥突厥、統国訳漢文大成 經子史部 第 11 卷 064p

高祖神堯大聖光孝皇帝中之上武德二年（己卯，619年）

●十一月，己卯（15-2+1=14日），劉武周は浩州を寇す。（劉武周は復た西河を寇す）

■ [李世民は柏壁駐屯で力を蓄える] 秦王の世民は兵を引いて龍門より冰の堅きに乗じて河を渡り，柏壁（龍門関の東北）に屯し，宋金剛と相持つ。時に河東（黄河の東の意味）の州縣は，俘掠之餘，未だ倉廩有らず，人情は惛擾し，聚まりて城堡に入り，征（統は徵）斂すれども得る所無し，軍中食は乏し。世民は教を發して民を諭し，民は世民が帥となり而して來たと聞き，歸附せざるは莫し，近きより遠きに及び，至る者は日々に多く，然る後に漸く其の糧食を收め，軍食は以て充ちる。乃ち兵を休め馬に秣^{まぐさ}かい，唯だ偏裨をして間に乗りて抄掠せしめ，大軍は壁を堅くして戦わず，是に由り賊勢は日々に衰える。

■ [李世民は敵中孤立する危機] 世民は嘗て自ら輕騎を帥いて敵を覘い，騎は皆な四散し，世民は獨り一甲士と（11-065p）丘に登り而して寝ねる。俄に而して賊兵は四合し，初め之を覺らず，會々蛇有り鼠を逐いて，甲士之面に觸れ，甲士は驚いて寤め，遂に世民に白し，俱に馬に上り，馳せること百餘歩，賊の及ぶ所と為り，世民は大羽箭を以て射て其の驍將を殪し，賊騎は乃ち退く。

■ [李世勣はまず竇建徳の信頼を得る] 李世勣（594-668 元の名は徐世勣、唐の姓を授けられ、李世勣となり、李世民の諱を避けて李勣とす。のち高句麗征服の功あり）は唐に歸さんと欲し，禍いが其の父（徐蓋）に及ぶを恐れ，郭孝恪に謀る。孝恪は曰く、

「吾は新たに竇氏に事え，動もすれば則ち疑われる，宜しく先ず效を立てて以て信を取り，然る後に圖る可き也。」

世勣は之に従う。王世充は獲嘉を襲い（今年閏二月に李育徳を殺し獲嘉を取る），之を破り，俘獲する所多く，以て建徳に獻じ，建徳は是に由りて之を親しむ。初め，漳南（貝州の漳南県は漢の東陽県、開皇十八年にとす）の人の劉黑闥は，少くして驍勇狡獪なり，竇建徳と善し，後に群盜と為り，轉じて郝孝徳、李密、王世充に事える。世充は以て騎將と為す。世充が為す所を見る毎に，竊に之を笑う。世充は黑闥をして新郷（隋は汲・獲嘉二件の地を分けて、古の新樂城に於いて新郷県を置く、時に義州に属す、後に殷州に属す）を守らせめ，李世勣は撃ちて之を虜とし，建徳に獻ず。建徳は署して將軍と為し，爵の漢東公を賜り，常に奇兵を將いて東西に掩襲せしめ，或は潜に敵境に入りて虚實を覘視す。黑闥は往往にして間に乗りて奮撃し，克獲し而して還る。

■十二月，庚申（56-31+1=26日），上は華山に獵す。

■● [李孝基は捕虜となる] 於筠は永安王の孝基に説く、

「急に呂崇茂を攻めるべし」

と，獨孤懷恩は先ず攻具を成し，然る後に進むを請い，孝基は之に従う。崇茂は救いを宋金剛に求め，金剛は其の將の善陽（朔州の善陽県は漢の定襄県。隋の大業の初め善陽を置く。現・山西省朔州市朔城区）の尉遲敬徳、尋相を遣わし兵を將いて夏縣に奄至せしむ。孝基は表裡に敵を受け，軍は遂に大敗し，孝基、懷恩、筠、唐儉及び行軍總管の劉世讓は皆な虜とする所と為る。敬徳の名は恭，字を以て行われる。

■ 〔裴寂の責任追及、許す〕 上は裴寂を征して入朝せしめ、其の敗軍を責め、吏に下し、既に而して之を釋し、寵待は彌々厚し。

■ 〔李世民は反撃〕 尉遲敬德、尋相は將に滄州に還らんとし、秦王の世民は兵部尚書の殷開山、總管の秦叔寶等を遣わして之を美良川に邀え、大いに之を破り、斬首は二千餘級。之頃して、敬德、尋相は潛に精騎を引きて王行本を蒲板に援い、世民は自ら歩騎三千を將いて、問道より夜安邑（古県、虞州に属す）に趨き、邀撃し、大いに之を破り、敬德、相は僅に身を以て免れ、悉く其の衆を俘とし、復た柏壁に歸る。

■ 〔李世民は敢えて宋金剛と戦わず〕 諸將は咸な宋金剛と戦わんと請い、世民は曰く、
「金剛の懸軍は深く入り、精兵猛將、咸な是に聚まる。武周は太原に據り、金剛に倚りて扞蔽を為す。金剛の軍は蓄積無く、虜掠を以て資と為し、利は速かに戦うに在り。我は營を閉じ銳を養い以て其の鋒を挫き、兵を汾、隰（隋の龍泉・西河二郡の地）に分けて、其の心腹を沖く。彼は糧盡き計窮まり、自ら當に遁走すべし。當に此の機を待つべし、未だ宜しく速かに戦うべからず。」

● 〔孝基殺害〕 永安壯王の孝基は逃げ歸るを謀り、劉武周は之を殺す。

● 〔竇建德は河南をめざす〕 李世勣は復た人を遣わして竇建德を説いて曰く、
「曹、戴の二州（隋は曹州を濟陰に置き、戴州を成武に置く。大業の初めに二州を廢し、併せて濟陰郡と為す。大業の乱に復た州と為す）は、（11-066p）戸口完實す、孟海公は竊に其の地を有ち、鄭人と外は合い内は離れる。若し大軍を以て之に臨めば、期を指して取る可からん。既に海公を得、以て徐（王世充は時に王世辨を徐州に置く）、兗（徐圓朗を置く）に臨めば、河南は戦わず而して定まる可き也。」

建德は以て然りと為し、自ら將として河南を徇えんと欲し、先ず其の行臺の曹旦等を遣わして兵五萬を將いて河を濟り、世勣は兵三千を引いて之に會す。

高祖神堯大聖光孝皇帝中之上武德三年（庚辰，620年）

■ 〔唐はようやく蒲板を占領〕 春，正月，將軍の秦武通は王行本を蒲板に攻める。行本は出でて戦い而して敗れ、糧は盡き援は絶え、圍みを突いて走らんと欲し、之に隨う者無し、戊寅（14-1+1=14日）、開門して出で降る。辛巳（17-1+1=17日）、上は蒲州に幸し、行本を斬る。秦王の世民は輕騎にして上に蒲州（蒲板に治す）に謁す。宋金剛は絳州（正平に治す）を圍む。癸巳（29-1+1=29日）、上は長安に還る。

● 〔李世勣は唐に歸すを画策〕 李世勣は竇建德が河南に至るを俟ち、其の營を掩襲し、之を殺さんと謀り、其の父（徐蓋）並びに建德の土地を得て以て唐に歸さんと冀う。會々建德の妻は産み、之久しく至らず。

● 〔李商胡は独断で曹旦を謀る〕 曹旦は、建德之妻の兄也、河南に在り、侵擾する所多く、諸賊の羈屬する者は皆な之を怨む。賊帥の魏郡の李文相は、李商胡と號し、衆五千餘人を聚め、孟津中渾（河陽の中渾城なり、東魏が築く、かつて河陽関を置く）に據る。母の霍氏は、亦た善く騎射し、自ら霍總管と稱す。世勣は商胡に結びて昆弟と為り、入りて商胡之母を拜す。母は泣きて世勣に謂って曰く、

「竇氏は無道なり、如何して之に事えるや！」

世勣は曰く、

「母は憂うる無かれ、一月に過ぎず、當に之を殺し、相い與に唐に歸する耳！」

世勳は辭して去り、母は商胡に謂って曰く、

「東海公は我に許す、共に此の賊を圖り、事久しく變生せん、何ぞ必ずしも其の來たるを待たん、速かに決するに如かず決。」

是の夜、商胡は曹旦の偏裨二十三人を召し、之に酒を飲まし、盡く之を殺す。旦の別將の高雅賢、阮君明は尚ほ河北に在り未だ濟らず、商胡は巨舟四艘を以て河北之兵三百人を濟し、中流に至り、悉く之を殺す。獸醫（軍の牛馬担当獣医）有り水を遊ぎて免るるを得、南岸に至り、曹旦に告げ、旦は嚴警して備えを為す。商胡は既に事を擧げ、始めて人を遣わして李世勳に告げる。世勳は曹旦と營を連ね、郭孝恪は世勳に旦を襲うを勧め、世勳は未だ決せず、旦が已に備え有るを聞き、遂に孝恪と數十騎を帥いて來奔す。商胡は復た精兵二千を引いて北に阮君明を襲い、之を破る。高雅賢は衆を收めて去り、商胡は之を追い、及ばず而して還る。建徳の群臣は李蓋を誅せんと請い、建徳は曰く、

「世勳は、唐の臣にして、我の虜にする所と為り、本朝を忘れざるは、乃ち忠臣也、其の父（徐蓋）何の罪あらん！」

遂に之を赦す。

■● [李世勳は長安に逃亡] 甲午（30-1+1=30日）、世勳、孝恪は長安に至る。曹旦は遂に濟州（武徳の初め、張青特は濟北に拠る濟北郡は濟州。この後に建徳は唐と虎牢に相持つ。張青特は糧を運び、唐の獲る所と為る。蓋しを以てに降る）を取り、復た洺州に還る。（11-067p）

■二月、庚子（36-30+1=7日）、上は華陰に幸す。

● [劉武周は潞州を寇す] 劉武周は兵を遣わして潞州（春秋の潞子國、秦漢、上黨郡と為す。北周は潞州を立てる。山西省冀寧道潞城県の西北に治す、現・長治市上党区）を寇し、長子（現・山西省長治市長子県）、壺關（現・山西省長治市壺関県）を陥す。潞州刺史の郭子武は御ぐ能わず、上は將軍の河東（蒲州を帯びる）の王行敏を以て之を助けしむ。行敏は子武と叶（葉×）わず、或は言う、

「子武は將に叛せんとす」

と、行敏は子武を斬り以て徇える。乙巳（41-30+1=12日）、武周は復た兵を遣わして潞州を寇す、行敏は撃ちて之を破る。

● [開州蠻酋] 壬子（48-30+1=19日）、開州（隋の巴東郡の盛山県。漢の巴東胸忍県、義寧元年に巴東の盛山。新浦・通川の萬世・西流を分けて萬州を置く、武徳元年に開州とす。四川省東川道開県、現・重慶市開州区）の蠻酋の冉肇則は通州（漢の宕渠県、梁は萬州を置く。北魏は通州、隋は通川郡、武徳元年は復た通州。現・重慶市万州区）を陥す。

■甲寅（50-30+1=21日）、將軍の桑顯和等を遣わして呂崇茂を夏縣に攻めしむ。

■ [獨孤懷恩の誅殺] 初め、工部尚書の獨孤懷恩は蒲板を攻め、久しく下らず、失亡多く、上は數々敕書を以て之を誚讓す、懷恩は是に由り怨望す。上は嘗て戯れに懷恩に謂って曰く、

「姑之子（煬帝と李淵）は皆な已に天子と為り、次は應に舅之子に至るべき乎？」

懷恩は亦た頗る此を以て自負し、或る時は腕を扼して曰く、

「我が家は豈に女のみ獨り貴かからん乎？」

遂に麾下の元君寶と反を謀る。會々懷恩、君寶は唐儉と皆な尉遲敬徳に没し、君寶は儉に謂って曰く、

「獨孤尚書は近く大事を謀る、若し能く早く決せば、豈に此の辱かしめ有らん哉！」

秦王の世民が敬徳を美良川に敗るに及び、懷恩は逃げ歸り、上は復た之をして兵を將いて蒲板を攻め使

む。君實は又た儉に謂って曰く、

「獨孤尚書は遂に難を抜けて還るを得、復た蒲板に在り、王者は死せずと謂う可し！」

儉は懷恩が遂に其の謀を成すを恐れ、乃ち尉遲敬徳を説き、劉世讓をして還り唐と連和せ使めんと請う、敬徳は之に従い、遂に懷恩の反狀を以て聞す。時に王行本は已に降り、懷恩は入りて其の城に據り、上は方に河を濟り懷恩の營に幸し、已に舟に登る矣、世讓は適々至る。上は大いに驚いて曰く、

「吾は免かるるを得、豈に天に非ざる也！」

乃ち懷恩を召さ使む。懷恩は未だ事の露われるを知らず、輕舟來たりて至る。即ち執りて以て吏に屬し、分けて黨與を捕える。甲寅（50-30+1=2 1日）、懷恩及び其の黨を誅す。

● **[竇建徳の名政治]** 竇建徳は李商胡を攻め、之を殺す。建徳は洺州に至（続による補充）り農桑を勸課し、境内は盜無く、商旅は野宿す。

突厥 **[突厥は隋王を立てる]** 突厥の處羅可汗は楊政道（齊王楊暕の遺腹の子）を迎え、立てて隋王と為し。中國士民の北に在る者は、處羅は悉く以て之に配し、衆萬人有り。百官を置き、皆な隋の制に依り、定襄（隋の定襄郡、大利城に治す）に居る。

● **三月**、乙丑（1-0+1=1日）、劉武周は其の將の張萬歳を遣わして浩州（唐は西河郡を浩州とす、隰城に治す、現・山西省呂梁市汾陽市）を寇し、李仲文は撃ちて之を走らせ、俘斬は數千人。

■ 納言を改めて侍中と為し、内史令を中書令と為し、給事郎を給事中と為す。（官名を復旧）

■ 甲戌（10-0+1=1 1日）、内史侍郎の卦德彝を以て中書令と為す。（11-068p）

■ **[王世充の峻烈で逃亡相次ぐ]** 王世充の將帥、州縣の來降する者は、時月相い繼ぐ。世充は乃ち其の法を峻とし、一人亡叛すれば、家を擧げて少長と無く戮に就き、父子、兄弟、夫婦は相い告げ而して之を免ざるを許す。又た五家をして保を為さ使め、家を擧げて亡げる者有りて、四鄰が覺らざれば、皆な坐して誅す。殺人は益々多く而して亡げる者は益々甚だし、樵采之人に至るまで、出入は皆な限數有り。公私は愁窘し、人の生を聊んぜず。又た宮城を以て大獄と為し、意の忌む所の者は、其の家屬を並せて宮中に收め系ぐ。諸將の出でて討つには、亦た其の家屬を宮中に質とし、禁止する者は常に萬口を減ぜず、餓死する者日々に數十有り。世充は又た臺省の官を以て司（洛州）、鄭（汜水）、管（管城）、原（沁水）、伊（襄城）、殷（獲嘉）、梁（睢陽）、湊（湊州を闕く、九域志に鄭州の古跡に湊水有り）、嵩（嵩陽）、谷（大谷）、懷（河内）、德（武德）等十二州の營田使と為し、丞、郎（尚書左右丞及び諸曹郎なり）の此の行を為すを得る者は、喜ぶこと登仙するが若し。

■ 甲申（20-0+1=2 1日）、行軍副總管の張倫は劉武周を浩州に敗り、俘斬は千餘人。

■ **[石州攻略]** 西河公の張綸、真鄉公の李仲文は兵を引いて石州（隋の離石郡、現・山西省呂梁市離石区）に臨み、劉季真是懼れ而して詐り降る。乙酉（21-0+1=2 2日）、季真を以て石州總管と為し、姓の李氏を賜い、彭山郡王に封ず。

■ 蠻酋の冉肇則は信州（隋の巴東郡、武德二年に改めて信州とす、奉節県に治す）を寇し、趙郡公の孝恭は與に戦い、利あらず。李靖は兵八百を將いて、襲撃し、之を斬り、五千餘人を俘とす。己丑（25-0+1=2 6日）、開、通二州を復す。孝恭は又た蕭銑の東平王の闍提を撃ち、之を斬る。

■夏，四月，丙申（32-29+1=4日），上は華山を祠る。壬寅（38-29+1=10日），長安に還る。

■益州道行臺を置き，益（隋の蜀郡）、利（隋の義城郡）、會（隋の涼川郡、會寧陳、西魏の會州）、鄜（隋の上郡、西魏の敷州）、涇（隋の安定郡）、遂（隋の遂寧郡）の六總管を以て焉に隸す。

●■ **【浩州の攻防】**劉武周は數々浩州を攻め，李仲文の敗る所と為る。宋金剛の軍中の食は盡きる。丁未（43-29+1=15日），金剛は北に走り，秦王の世民は之を追う。

■● **【羅士信は太子王玄應を落馬させる】**羅士信は慈澗（河南省壽安縣に在り、現・洛陽市宜陽縣）を圍み，王世充は太子の玄應をして之を救わしめ，士信は玄應を刺して馬から墜ち，人は之を救い，免かるるを得たり。

■壬子（48-29+1=20日），顯州道行臺の楊士林を以て行臺尚書令と為す。

■甲寅（50-29+1=22日），秦王の世民に益州道行臺尚書令を加える。

【李世民は晋陽回復、劉武周・宋金剛滅亡】

■● **【李世民は食わず急前進】**秦王の世民は追いて尋相に呂州（霍邑に治す、598年（開皇18年）隋設置。605年（大業元年）廢止。唐再設置、643年（貞觀17年）廢止、管轄縣は晋州と汾州に移管、現・臨汾市・呂梁市）に及び，大いに之を破り，勝ちに乗りて北げるを逐い，一晝夜に二百餘里を行き，戦うこと數十合。高壁嶺に至り，總管の劉弘基は轡を執りて諫めて曰く、

「大王は賊を破り，北げるを逐いて此に至る，功は亦た足れり矣。深く入りて已まず，身を愛まざる乎！且つ士卒は饑え疲れる，宜しく留まりて此に壁となるべし，兵糧の畢く集まるを俟ちて，然る後に復た進めば，未だ晩からざる也。」

世民は曰く、

「金剛の計は窮まり而して走る，衆心は離れ沮む。（11-069p）功は成り難し而して敗れ易く，機は得難く而して失い易し，必ず此の勢いに乗りて之を取るべし。若し更に淹留すれば，之をして計立ち備え成ら使めば，復た攻める可からず矣。吾は忠を竭くし國に徇う，豈に身を顧みん乎！」

遂に馬に策うちて而して進み，將士は敢えて復た饑えを言わず。追いて金剛に雀鼠谷に及び，一日八戦し，皆な之を破り，俘斬は數萬人あり。夜，雀鼠谷（現・山西省晋中市介休市、呂梁市孝義市の間）の西原に宿し，世民は食わざること二日，甲を解かざること三日矣，軍中に止だ一羊有り，世民は將士と分け而して之を食う。丙辰（52-29+1=24日），陝州總管の於筠は金剛の所より逃げ來たり（去年十二月に金剛の捕虜となる）。世民は兵を引いて介休（介州治所）に趣き，金剛は尚ほ衆二萬有り，戊午（54-29+1=26日），西門を出，城を背にして陳を布き，南北は七里あり。世民は總管の李世勣等を遣わして與に戦い，小しく卻き，賊の乗じる所と為る。世民は精騎を帥いて之を撃ち，其の陳の後ろに出，金剛は大敗し，斬首は三千級。金剛は輕騎にして走り，世民は之を追うこと數十里，張難堡（張難は人名）に至る。浩州行軍總管の樊伯通、張德政は堡に據りて自ら守り，世民は胄を免ぎて之に示し，堡中は喜び噪ぎ且つ泣く。左右は告げるに王の食わざるを以てし，濁酒、脱粟飯を獻ず。

■● **【尉遲敬德は李世民に降伏、劉武周・宋金剛は突厥に逃走】**尉遲敬德は餘衆を收めて介休を守り，世民は任城王の道宗、宇文士及を遣わして往きて之を諭さしめ，敬德は尋相と介休及び永安（漢の中陽縣、北魏は改名。浩州に屬す）を擧げて降る。世民は敬德を得，甚だ喜び，以て右一府統軍と為し，其の舊衆八千を將いて，諸營と相い參ぜ使む。屈突通は其の變を慮り，驟々以て言を為し，世民は聽かず。劉武周は金剛の敗れるを聞き，大いに懼れ，并州を棄てて突厥に走る。金剛は其の餘衆を収め，復た戦わんと欲

し、衆は肯えて従う莫く、亦た百餘騎と突厥に走る。

■ [李世民は晋陽を回復] 世民は晋陽に至り、武周の署する所の僕射の楊伏念は城を以て降る。唐儉（捕虜となる）は府庫を封じて以て世民を待ち、武周の得る所の州縣は皆な唐に入る。

● [突厥 [宋金剛は突厥に斬られる] 未だ幾もなくして、金剛は上谷（出身地）に走らんと謀り、突厥は追いて獲り、之を腰斬す。嵐州總管の劉六兒（去年五月に降り、今年三月季真是降るも実は宋混合・劉武周に附く）は宋金剛に従いて介休に在り、秦王の世民は擒えて之を斬る。其の兄の季真是、石州を棄て、劉武周の將の馬邑の高滿政に奔り、滿政は之を殺す。

● [突厥は劉武周を殺害] 武周之南を寇す也、其の内史令の苑君璋は諫めて曰く、

「唐主は一州之衆を擧げて、直ちに長安を取り、向かう所敵無し、此れ乃ち天授にして、人力に非ざる也。晋陽以南は、道路は險隘にして、縣軍（懸軍）は深く入り、後に繼ぐ無し、君は進み戦いて利あらざれば、何を以て自ら還らん！如かず、北に突厥に連なり、南に唐朝に結び、南面して孤と稱せん、長策と為すに足る。」

武周は聽かず、君璋を留めて朔州を守らしむ。敗れるに及び、泣きて君璋に謂って曰く、

「君の言を用いず、以て此に至る。」

之久しく、武周は亡げて馬邑に歸らんと謀り、事は洩れ、突厥は之を殺す。突厥は又た君璋を以て大行臺と為し、其の餘衆を統べしめ、仍ほ郁射設をして兵を督して鎮を助け令む。

■● [黃君漢は王玄應を破る] 庚申（56-29+1=28日）、懷州總管の黃君漢は王世充の太子の玄應を西濟州（武徳二年に王世充の將の丁伯徳は濟源縣を以て來降す、西濟州を置く、濟北の濟州とは別）に撃ち、大いに之を破る。熊州行軍總管の史萬寶は之を九曲に邀え、又た之を破る。

● 辛酉（57-29+1=29日）、王世充は鄧州を陥す。

■ [李淵は勝利祝賀宴会] 上は并州の平らぐを聞き、大いに悦ぶ。壬戌（58-20+1=30日）、群臣と宴し、繪帛を賜り、自ら御府（内侍省内府局に属す）に入り、力を盡くして之を取ら使む。唐儉の官爵を復し、仍ほ以て并州道安撫大使と為す。籍する所の獨孤懷恩の田宅資財は、悉く以て之を賜う。（懷恩の反謀を暴く報償）

■ [世民は李仲文を并州總管] 世民は李仲文を留めて并州に鎮せしむ。劉武周は數々兵を遣わして入寇し（劉武周の死の前をいう）、仲文は輒ち撃ちて之を破り、城堡（馬邑郡界）百餘所を下す。仲文に詔して并州總管を檢校せしむ。

● [竇建徳は幽州に克たず] 五月、竇建徳は高士興を遣わして李藝を幽州に撃たしめ、克たず、退いて籠火城に軍す。藝は襲撃し、大いに之を破り、斬首は五千級。建徳大將軍の王伏寶は、勇略なること軍中に冠たり、諸將は之を疾み、其の謀反を言い、建徳は之を殺し、伏寶は曰く、

「大王は奈何して讒言を聽き、自ら左右の手を斬る乎！」

■ [李世民は夏県を屠る] 初め、尉遲敬徳は兵を將いて呂崇茂を助けて夏縣を守り、上は潜に遣使して崇茂の罪を赦し、夏州（夏県、現・陝西省榆林市一帯）刺史に拜し、敬徳を圖ら使め、事は洩れ、敬徳は之を殺す。敬徳は去り、崇茂の餘黨は復た夏縣に據りて拒み守る。秦王の世民は軍を引いて晋州より還りて夏縣を攻め、壬午（18+60-59+1=20日）、之を屠る。

■ 辛卯（27+60-59+1=29日）、秦王の世民は長安に至る。

突厥● **[突厥と王世充の交易]** 是の月、突厥は**阿史那掲多**を遣わして馬千匹を**王世充**に獻じ、且つ求婚す。**世充**は宗女を以て之に妻あわせ、並せて之と互市する。

■ **[唐は杜伏威を揚州刺史]** 六月、壬辰（28-28+1=1日）、詔して和州總管、東南道行臺尚書令の**楚王**の**杜伏威**を以て使持節、總管江淮以南諸軍事、揚州刺史、東南道行臺尚書令、淮南道安撫使と為し、進めて吳王に封じ、姓の**李氏**を賜る。**輔公祐**を以て行臺左僕射と為し、舒國公に封じる。丙午（42-28+1=15日）、皇子の**元景**を立てて趙王と為し、**元昌**を魯王と為し、**元亨**を魯王と為す。

● **[楊士林殺害]** 顯州行臺尚書令の**楚公**の**楊士林**は、唐の官爵を受けると雖も、而るに北に**王世充**に結び、南に**蕭銑**に投じる。廬江王の**瑗**に詔して安撫使の**李弘敏**と之を討たしむ。兵は未だ行かず、長史の**田瓚**は**士林**の忌む所と為り、甲寅（50-28+1=23日）、**瓚**は**士林**を殺し、**世充**に降り、**世充**は**瓚**を以て顯州總管と為す。

■ **[晋陽の李仲文は突厥を制する能わず]** 秦王の**世民**之**劉武周**を討つ也、突厥の**處羅可汗**は其の弟の**步利設**を遣わして二千騎を帥いて唐を助ける。**武周**は既に敗れ、是の月、**處羅**は晋陽に至り、總管の**李仲文**は制する能わず。又た**倫特勒**を留め、數百人に將たらしめ、**仲文**を助けて鎮守すと雲い、石嶺（代州の関。山西省冀寧道陽曲縣の東北、險要）より以北は、皆な兵を留めて之に戍せしめ而して去る。**(11-071p)**

■● **[李世民の王世充討伐軍、屈突通の二子]** 上は**王世充**を撃つを議し、**世充**は之を聞き、諸州の鎮の驍勇を選びて皆な洛陽に集め、四鎮將軍を置き、人を募りて分けて四城（洛陽にあり）を守らしむ。秋、七月、壬戌（58-58+1=1日）、秦王の**世民**に詔して諸軍を督して**世充**を撃たしむ。陝東道行臺の**屈突通**（陝東道行臺の左僕射を通判す）の二子は洛陽に在り、上は**通**に謂って曰く、

「今卿をして東征せしめんと欲す、卿の二子は如何？」

通は曰く、

「臣は昔俘囚と為り（184 卷義寧元年十二月にあり）、分は當に死に就く、陛下は縛を釋き、加えるに恩禮を以てす。是之時に當たり、臣は心口相い誓い、期するに更生の餘年を以て陛下の為に節を盡くさんと、但だ恐れるは死する所を獲ざらん耳。今先驅に備わるるを得、二兒は何ぞ顧みるに足りん乎！」

上は歎いて曰く、

「義に徇ずる之士、一に此に至る乎！」

突厥●■ **[突厥は王世充と結び、李仲文を疑う]** 癸亥（59-58+1=2日）、突厥は遣使して潜に**王世充**に詣る。潞州總管の**李襲譽**は邀撃して、之を敗り、虜牛羊は萬計なり。

驃騎大將軍の**可朱渾定遠**は告げる、

「并州總管の**李仲文**は突厥と通謀し、洛陽の兵交わるを俟ちて、胡騎を引いて直ちに長安に入らんと欲す。」

甲戌（10+60-58+1=13日）、皇太子に命じて蒲板に鎮し以て之に備えしむ、又た禮部尚書の**唐儉**を遣わして并州を安撫せしめ、暫く并州總管府を廢し、**仲文**を征して入朝せしむ。

■● **[李世民と王世充は全面対決]** 壬午（18+60-58+1=21日）、秦王の**世民**は新安（洛州の西七十里）に至る。**王世充**は魏王の**弘烈**を遣わして襄陽に鎮せしめ、荊王の**行本**をして虎牢に鎮せしめ、宋王の**泰**をして懷州に鎮せしめ、齊王の**世暉**をして南城（皇城の南端門の外）を檢校せしめ、楚王の**世偉**をして寶城（寶城朝堂、蓋し皇城なり、東城の中にあり）を守らしめ、太子の**玄應**をして東城（皇城の東）を守らしめ、漢王の**玄恕**を

して含嘉城（含嘉倉城）を守らしめ、魯王の道衡をして曜儀城（東城の東）を守らしめ、世充は自ら戦兵を將い、左輔大將軍の楊公卿は左龍驤二十八府の騎兵を帥い、右游擊大將軍の郭善才は内軍二十八府の歩兵を帥い、左游擊大將軍の跋野綱は外軍二十八府の歩兵を帥い、總て三萬人、以て唐に備える。弘烈、行本は、世偉之子。泰は、世充之兄の子也。

●**突厥**■梁師都は突厥、稽胡の兵を引きて入寇し、行軍總管の段德操は撃ちて之を破り、斬首は千餘級。
■●**[王世充は一時李世民を包圍]** 羅士信は前鋒（続は前軍）を將いて慈澗を圍み、王世充は自ら兵三萬を將いて之を救う。己丑（25+60-58+1=28日）、秦王の世民は輕騎を將いて前みて世充を覘い、猝に之と遇い、衆寡敵せず、道路は險扼にして、世充の圍む所と為る。世民の左右は馳せて射、皆な弦に應じ而して斃れ（続は欠如）、其の左建威將軍の燕琪を獲り、世充は乃ち退く。世民は營に還らんとし、埃塵は面を覆い、軍は復た識らず、之を拒がんと欲し、世民は胄を免ぎて自ら言い、乃ち入るを得る。旦日、步騎五萬を帥いて慈澗に進軍す。世充は慈澗之戍を抜き、洛陽に歸る。世民は行軍總管の史萬寶を遣わして宜陽より南に龍門に據り、將軍の劉德威をして太行より東して河内を圍ましめ、(11-072p) 上谷公の王君廓をして洛口より其の餉道を斷たしめ、懷州總管の黃君漢をして河陰より回洛城を攻めしめる。大軍は北邙に屯し、營を連らねて以て之に逼る。世充の洧州（世充は蓋し扶溝・鄆陵を以て洧州を置く、河南の尉氏県、現・開封市尉氏県）長史の繁水（武陽郡の県、現・邯鄲市大名県）の張公謹は刺史の崔樞と州城を以て來降す。

【各地の勢力は唐に続々來降】

■**[西爨蠻の入貢]** 八月、丁酉（33-28+1=6日）、南寧（現・雲南省曲靖市麒麟区）の西爨蠻は遣使して入貢す。初め、隋末に蠻の爨玩（178 卷隋の文帝開皇 17-18 年）は反し、誅せられ、諸子は没して官奴と為り、其の地を棄てる。帝は即位し、玩の子の弘達を以て昆州（隋が置く、隋亂れ廢し。武徳元年に南中を開きて復た置く、馬平県に治す、現・広西壮族自治区柳州市柳北区雀儿山附近“双山”）刺史と為し、其の父の屍を持して歸葬せ令む。益州刺史の段綸は因りて遣使して其の部落を招諭し、皆な來降す。

■己亥（35-28+1=8日）、竇建徳の共州（衛州の共城県に武徳元年置く、現・河南省新郷市衛輝市）縣令の唐綱は刺史を殺し、州を以て來降す。

■鄧州（今年五月に王世充が陥す、現・南陽市）の土豪は王世充の署する所の刺史を執りて來降す。

■癸卯（39-28+1=12日）、梁師都の石堡（夏州の東にあり、開元・天寶の間に吐蕃と争う石堡城ではない）留守の張舉は千餘人を帥いて來降す。

■●**[回洛城攻防戦]** 甲辰（40-28+1=13日）、黃君漢は校尉の張夜叉を遣わして舟師を以て（黄河を渡り）回洛城（538年東魏西魏の戦いの頃、現・河南省洛陽市孟津県東）を襲わしめ、之に克ち、其の將の達奚善定を獲り、河陽の南橋を斷ち而して還り、其の堡聚二十餘を降す。世充は太子の玄應をして楊公卿等を帥いて回洛を攻め使め、克たず、乃ち月城を其の西に築き、兵を留めて之に戍せしむ。

●■**[王世充と李世民は水を隔てて応酬]** 世充は青城宮（洛城西北）に陳し、秦王の世民も亦た陳を置き之に當る。世充は水を隔てて世民に謂って曰く、

「隋室は傾覆し、唐は關中に帝となり、鄭は河南に帝となり、世充は未だ嘗て西を侵さざるに、王は忽ち兵を擧げて東に來たるは、何ぞ也？」

世民は宇文士及をして之に應ぜ使めて曰く、

「四海は咸な皇風を仰ぎ、唯だ公は獨り聲教を阻む、此が為に而して來たる！」

世充は曰く、

「相い與に兵を息め好みを講ずるも、亦た善しからず乎！」

又た之に應えて曰く、

「詔を奉じて東都を取る、^よ好みを講ぜ令めざる也！」

暮に至り、各々兵を引いて還る。

■● 〔唐は竇建徳と連和〕 上は遣使して竇建徳と連和し、建徳は同安長公主（李淵の同母妹、黎陽の破れるや建徳に没す）を遣わして使者に隨いて俱に還る。

■乙卯（51-28+1=24日）、劉徳威は懷州を襲い、其の外郭に入り、其の堡聚を下す。

■九月、庚午（6+60-57+1=10日）、梁師都の將の劉旻は華池（慶州の華池県は西魏の蔚州、北周は廢す。隋の仁壽の初めに華池県を置き、今復林州を置く。甘肅省涇原道合水県東北120里、現・慶陽市華池県）を以て來降し、以て林州總管と為す。

■癸酉（9+60-57+1=13日）、王世充の顯州總管の田瓚（この六月に王世充に降る）は所部二十五州を以て來降す。是より襄陽の聲問は世充と絶つ。（王世充は王弘烈をして襄陽に鎮せしむ。襄陽より洛に至るには、道は南陽に出る。鄧州が既に唐に属し、南陽の道が使えなければ、顯州より蔡汝に出て洛に至る。顯州が唐に降り、故に襄陽に連絡できない）

■● 〔王君廓は少を以て衆を制す〕 史萬寶は進みて甘泉宮（漢の甘泉宮は京兆の醴泉県にあり。史萬寶は新安より軍を進めて洛陽に迫る。まさに漢の甘泉宮に至るべからず。隋志に河南の壽安県は北魏の甘棠県にして、顯仁宮あり。泉はまさに棠につくるべし）に軍す。丁丑（13+60-57+1=17日）、秦王の世民は右武衛將軍の王君廓を遣わして（11-073p）轅轅（洛州緱氏県の東南に轅轅故関あり、現・洛陽市偃師区）を攻め、之を抜く。王世充は其の將の魏隱等を遣わして君廓を撃たしめ、君廓は偽りて遁げ、伏を設け、大いに之を破り、遂に東に地を徇え、管城（宋陽郡管城県は旧中牟という。開皇十六年に分けて管城県を置く。管州治所、現・鄭州市金水区）に至り而して還る。是より先、王世充は郭士衡、許羅漢を將いて唐境を掠め、君廓は策を以て撃ち之を卻け、詔して之を勞いて曰く、
「卿は十三人を以て賊一萬を破り、古より少を以て衆を制す、未だ之れ有らざる也。」

■ 〔本領安堵で唐に來降相次ぐ〕 世充の尉州刺史の時德睿は所部、杞（雍丘）、夏（陽夏）、陳（宛丘）、隨（涇州か）、許（長社）、潁（汝陰）、尉（尉氏）七州を帥いて來降す。秦王の世民は便宜を以て州縣の官を命じ並びに世充の署する所に依り、變易する所無し、尉州を改めて南汴州と為し、是に於いて河南の州縣は相い繼ぎて來降す。

■ 〔尉遲敬徳を疑わず、王世充に大勝〕 劉武周の降將の尋相等は多く叛き去る。諸將は尉遲敬徳を疑い、之を軍中に囚える。行臺左僕射の屈突通、尚書の殷開山は世民に言つて曰く、

「敬徳は驍勇絶倫なり、今既に之を囚え、心は必ず怨望す、之を留めれば恐らくは後患と為らん、遂に之を殺すに如かず。」

世民は曰く、

「然らず。敬徳が若し叛すれば、豈に尋相之後に在らん邪！」

遽に命じて之を釋さしめ、引いて臥内に入れ、之に金を賜り、曰く、

「丈夫の意氣は相い期し、小嫌を以て意に介す勿れ、吾は終に讒言を信じて以て忠良を害さず、公は宜しく之を體すべし。必ず去らんと欲する者は、此の金を以て相い資し、一時事を共にする之情を表する也。」

辛巳（17+60-57+1=21日）、世民は五百騎を以て戰地^{めぐ}を行り（威力偵察）、魏の宣武陵（景陵、北邙山にあり、北魏の世宗は宣武帝と諡す）に登る。王世充は歩騎萬餘を帥いて猝に至り、之を圍む。單雄信は槊を引いて直ちに世民に趨き、敬徳は馬を躍らせて大呼し、横ざまに雄信を刺して馬より墜し、世充の兵は稍卻き、敬

徳は世民を翼して圍を出ず。世民、敬徳は更に騎兵を帥いて還り戦い、世充の陳に出入し、行き返り礙さまたげる所無し。屈突通は大兵を引いて繼ぎ至り、世充の兵は大いに敗れ、僅に身を以て免れる。其の冠軍大將軍の陳智略を擒とし、斬首は千餘級、排槊（排を執り槊を執る）の兵六千を獲たり。世民は敬徳に謂って曰く、

「公は何んぞ相い報いる之速き也！」

敬徳に金銀一篋を賜り、是より寵遇は日々隆し。

■ 尉遲敬徳の槊を奪う技 敬徳は善く槊を避け、毎に單騎にて敵陳の中に入り、敵は槊を叢めて之を刺し、終に能く傷つける莫し、又た能く敵の槊を奪い返りて之を刺す。齊王の元吉は馬槊を善くするを以て自負し、敬徳之能を聞き、各々刃を去りて相い與に勝負を校せんと請い、敬徳は曰く、

「敬徳は謹んで當に之を去るべし、王は去る勿れ也。」

既に而して元吉は之を刺し、終に中てる能わず。秦王の世民は敬徳に問いて曰く、

「槊を避けると槊を奪うは、孰れか難きや？」

敬徳は曰く、

「槊を奪うは難し。」

乃ち敬徳に元吉の槊を奪うを命じる。元吉は槊を操りて馬を躍らせ、志は之を刺すに在り、敬徳は須臾にして三たび其の槊を奪う。元吉は面のあたりに相い歎異すると雖も、内に甚だ之を恥じる。(11-074p)

■ 叛胡は嵐州を陥す。

● ■ 杜才幹は邴元真を殺し唐に來降 初め、王世充は邴元真を以て滑州行臺僕射と為す。濮州刺史の杜才幹は、李密の故將也、元真が密に叛する（186 卷元年九月にあり）を恨み、詐りて其の衆を以て之に降る。元真は其の官勢を恃み、自ら往きて招慰し、才幹は出で迎え、延き入れて坐に就き、執り而して之を數めて曰く、

「汝は本は庸才なるに、魏公（魏化×）は汝を元僚に置き（李密が長史に任ずる事）、毫髮之功を建てず、乃ち滔天之禍いを構え、今來りて死を送る、是れ汝之分なり！」

遂に之を斬り、人を遣わして其の首を繼いで黎陽に至り密の墓に祭らしむ。壬午（18+60-57+1=2 2 日）、濮州（東平郡鄆城縣に旧濮陽縣を置く。開皇十六年に濮州を置く。大業の初め州を廢し鄆城縣を以て東平に属す。蓋し李密はまた州を置く。山東省東臨道濮縣、現・河南省濮陽市濮陽縣）を以て來降す。

突厥 ■ 突厥は唐にあからさまに侵入 突厥の莫賀咄設は涼州を寇し、總管の楊恭仁は之を撃ち、敗れる所と為り、男女數千人を掠め而して去る。

■ 丙戌（22+60-57+1=2 6 日）、田瓚を以て顯州總管と為し、爵の蔡國公を賜わる。

■ 冬、十月、甲午（30-27+1=4 日）、王世充の大將軍の張鎮周は來降す。

■ 羅士信は千金堡を屠る 甲辰（40-27+1=1 4 日）、行軍總管の羅士信は王世充を硤石堡に襲い、之を抜く。士信は又た千金堡を圍み、堡中の人々は之を罵る。士信は夜百餘人を遣わして嬰兒數十を抱きて堡下に至り、兒をして啼呼せ使め、詐りて云う、

「東都より來たりて羅總管に歸す。」

既に而して相い謂って曰く、

「此れ千金堡也、吾が屬は誤れり矣。」

即ち去る。堡中は以為えらく士信が已に去り、來たる者は洛陽の亡人なりと、兵を出して之を追う。士

信は兵を道に伏せ、其の門の開くを伺い、突入し、之を屠る。

【高開道・李藝・竇建徳・王玄應の攻防】

●● 〔高開道は李藝に因りて唐に來降〕 竇建徳之幽州を圍む（今年五月）也、李藝（元は羅藝）は急を高開道に告げ、開道は二千騎を帥いて之を救い、建徳の兵は引いて去り、開道は藝に因りて遣使して來降す。戊申（44-27+1=18日）、開道を以て蔚州（隋の雁門郡の靈丘・上谷郡の飛狐県の地、現・山西省大同市と河北省張家口市）總管と為し、姓の李氏を賜い、北平郡王に封じらる。開道は矢鏃有り頬に在り、醫を召して之を出さしむ、醫は曰く、

「鏃は深し、出す可からず。」

開道は怒り、之を斬る。別に一醫を召し、曰く、

「之を出せば恐らくは痛し。」

又た之を斬る。更に一醫を召し、醫は曰く、

「出す可し。」

乃ち骨を鑿ち、楔を其の間に置き、骨裂けること寸餘、竟に其の鏃を出す。開道は妓を奏し膳を進めて輟まず。

●● 〔竇建徳と李藝の死闘〕 竇建徳は衆二十萬を帥いて復た幽州を攻める。建徳の兵は已に堞を攀じらる。薛萬均、薛萬徹は敢死の士百人を帥いて地道より其の背に出、之を掩撃し、建徳の兵は潰走し、斬首は千餘級なり。李藝の兵は勝ちに乗りて其の營に薄り、建徳は營中に陳し、塹を填め而して出で、奮撃し、大いに之を破り、建徳は北げるを逐う。其の城下に至り、之を攻め、克たず而して還る。（11-075p）

●■ 〔楊慶の妻は板挟みで自殺、唐に來降〕 李密之敗れる也（186 卷元年九月にあり）、楊慶は洛陽に歸り、姓を楊氏に復す（184 卷義寧元年十一月にあり）。王世充の帝を稱するに及び（前卷本年四月）、慶は姓を郭氏に復し、世充は以て管州總管と為し、妻あわすに兄の女を以てす。秦王の世民は洛陽に逼り、慶は潜に人を遣わして降を請い、世民は總管の李世勣を遣わして兵を將いて往きて其の城に據らしむ。慶は其の妻と偕に來たらんと欲し、妻は曰く、

「主上は妾をして巾櫛に侍せ使む者、君之心を結ばんと欲する也。今君は既に付託に辜し、利に徇い全くするを求め、妾は將に君を如何せん！若し長安に至れば、則ち君の家の一婢なる耳、君は何ぞ用いるを為さん！願わくは送りて洛陽に至らしめん、君之恵み也。」

慶は許さず。慶は出で、妻は侍者に謂って曰く、

「若し唐が遂に鄭に勝てば、則ち吾が家は必ず滅びん。鄭が若し唐に勝てば、則ち吾が夫は必ず死せん。人生は此に至り、何ぞ生を用いるを為さん！」

遂に自殺す。庚戌（46-27+1=20日）、慶は來降す、姓を楊氏に復し、上柱國、郇國公に拜す。

●■ 〔太子の玄應は反乱続発に恐怖〕 時に世充の太子の玄應は虎牢に鎮し、宋（滎に作るべし、滎澤）、汴（汴水）之間に軍し、之を聞き、兵を引いて管城に趣き、李世勣は撃ちて之を卻く。郭孝恪をして書を為りて滎州（王世充は蓋し滎陽県を以て滎州を置く、滎にすべし）刺史の魏陸を説か使め、陸は密に降を請う。玄應は大將軍の張志を遣わして陸に就きて兵を徵せしめ、丙辰（52-27+1=26日）、陸は志等四將を擒とし、州を擧げて來降す。陽城（洛州に属す）令の王雄は諸堡を帥いて來降し、秦王の世民は李世勣をして兵を引いて之に應ぜ使め、雄を以て嵩州（陽城・嵩陽・陽翟を以て置く、現・河南省鄭州市登封市禹州市）刺史と為し、嵩南（嵩山の南、河南省登封市の五岳の一、少林寺武術の里）之路は始めて通じらる。魏陸は張志をして詐りて玄應の書を

為り、其の東道之兵を停め使め、其の將の張慈寶をして且く汴州に還ら令め、又た密に汴州刺史の王要漢に告げて慈寶を圖ら使め、要漢は慈寶を斬り以て降る。玄應は諸州の皆な叛するを聞き、大いに懼れ、奔りて洛陽に還る。詔して要漢を以て汴州總管と為し、爵の鄕國公を賜わる。

■ **[李大亮は樊城鎮を落とす]** 王弘烈は襄陽に據り、上は金州總管府（西城郡に梁は梁州を置く。尋ぎて改めて南梁州という。西魏は東梁州、次に金州に改める、總管府を置く。府に長史・司馬を置く）の司馬の涇陽の李大亮をして樊、鄧（襄陽鄧城縣は漢の鄧縣、南陽郡に属す。古の樊城。宋は安養縣と改める。この時樊城鎮は當に安養縣の界に在るべし。湖北省襄陽道襄陽縣、現・襄陽市樊城區）を安撫し以て之を圖ら令む。十一月、庚申（56-56+1=1日）、大亮は樊城鎮を攻め、之を抜き、其の將の國大安を斬り、其の城柵十四を下す。

● **[長沙の董景珍は來降す]** 蕭銑の性は褊狹にして、猜忌多し。諸將は功を恃みて恣横なり、好んで誅殺を専らとし、銑は之を患い、乃ち宣言す、

「兵を罷めて農を營むべし」

と、實は諸將之權を奪わんと欲す。大司馬の董景珍の弟は將軍為り、怨望し、亂を作さんと謀る。事は洩れ、伏して誅せらる。景珍は時に長沙に鎮し、銑は下詔して之を赦し、召して江陵に還らしむ。景珍は懼れ、甲子（60-56+1=5日）、長沙を以て來降す。峽州刺史の許紹に詔してして兵を出して之に應ぜしむ。

【突厥の義成公主の唐包圍網】

■ **[突厥][郭子和は突厥を避けて南遷す]** 雲州（定襄縣に開皇五年に雲州總管府を置き、大利城に治す）總管の郭子和は、先に突厥、梁師都と相い連結し、既に而して師都を寧朔城（夏州に属す、陝西省榆林道榆林縣南、現・榆林市榆陽區）に襲い、之に克つ。又た突厥の鼻隙を得、遣使して以て聞し、突厥の候騎の獲る所と為る。處羅可汗は大いに怒り、其の弟の子升を囚える。子和は自ら孤危なるを以て、其の民を帥いて南に徙らんと請い、詔して延州（延安、現・延安市宝塔區）の故城を以て之に處らしむ。

● **[突厥][梁師都は突厥・竇建徳と唐包圍網]** 張舉、劉旻之降る也、梁師都は大いに懼き、其の尚書の陸季覽を遣わして突厥の處羅可汗を説いて曰く、

「比者中原は喪亂し、分けて數國と為り、勢いは均しく力は弱し、故に皆北面して突厥に歸附す。今定楊可汗は既に亡び、天下は將に悉く唐の有と為らんとす。師都は灰滅を辭せずとも、亦た恐れるは次に可汗に及ばんと。若かず其の未だ定まらざるに及び、南に中原を取り、魏の道武の為す所の如く、師都は請う郷導を為さん。」

處羅は之に従い、謀りて莫賀咄設をして原州より入ら使め、泥步設をして師都和延州より入らしめ、處羅は并州より入り（続は欠如）、突利可汗をして奚（烏丸山に保する者）、霫（突厥の同族の遊牧民族、冷陁山に保す）、契丹（鮮卑山に保する者）、靺鞨（肅慎に居る）と幽州より入らしめ、竇建徳之師に會し滏口（滏水の口、河南省河北道臨漳縣の西、現・邯鄲市臨漳縣）より西に入り、晉（隋の臨汾郡）、絳（隋の絳郡）に會せんとす。莫賀咄と者、處羅之弟の咄苾也。突利と者、始畢之子の什鉢苾也。

[突厥][處羅は出陣直前卒す] 處羅は又た并州（晉陽）を取り以て楊政道（定襄におる隋室）を居かんと欲し、其の群臣は多く諫め、處羅は曰く、

「我が父は國を失い（178卷隋の開皇十九年にあり）、隋に頼りて立つを得、此の恩は忘れる可からず！」

將に師を出さんとし而して卒す。義成公主（隋室出身）は其の子の奧射設が丑弱を以て、之を廢し、更に

莫賀咄設を立て、頡利可汗と號す。乙酉（21+60-56+1=26日）、頡利は遣使して處羅之喪を告げ、上は之を禮すること始畢之喪（去年四月）の如し。

■●戊子（24+60-56+1=29日）、安撫大使の李大亮は王世充の沮（襄州南漳縣、北周は沮州を置く。漢の臨沮縣。隋は廢し、王世充はまた置く）、華（漢南縣に宋は華山郡を置く、西魏は郡を廢す、王世充は郡名を取りて華州を置く）二州を取る。

●是の月、竇建德は河を濟りて孟海公（曹州濟陽の人、義軍の領袖、山東省荷沢市定陶區孟海鎮孟海村人）を撃つ。

【李世民政勢で、王世充と竇建德は同盟】

●■〔王世充と竇建德の同盟〕初め、王世充は建德の黎陽を侵し、建德は襲いて殷州（獲嘉に治す、これ去年の鮪の事）を破り以て之に報いる。是より二國は交々悪く、信使は通じず。唐兵が洛陽に逼るに及び、世充は遣使して建德に救いを求める。建德の中書侍郎の劉彬は建德を説いて曰く、

「天下は大亂す、唐は關西を得、鄭は河南を得、夏は河北を得、共に鼎足之勢いを成す。今唐は兵を擧げて鄭に臨み、秋より冬に涉り、唐兵は日々に増し、鄭の地は日々に蹙まり、唐は強く鄭は弱く、勢いは必ず支えず。鄭が亡びれば、則ち夏は獨り立つ能わず矣。仇を解いて忿りを除き、兵を發して之を救うに如かず、夏は其の外を撃ち、鄭は其の内を攻めれば、唐を破るは必ずなり矣。唐の師が既に退けば、徐に其の變を觀、若し鄭取る可くんば則ち（11-077p）之を取り、二國之兵を並せ、唐の師之老れたるに乗り、天下は取る可き也。」

建德は之に従い、遣使して世充に詣らしめ、許すに赴援を以てす。又た其の禮部侍郎の李大師等を遣わして唐に詣らしめ、洛陽之兵を罷めるを請い、秦王の世民は之を留め、答えず。

■十二月、辛卯（27-26+1=2日）、王世充の許（隋の潁川郡）、亳（隋の譙郡）等十一州は皆な降を請う。

■●壬辰（28-26+1=3日）、燕郡王の李藝は又た竇建德の軍を籠火城に撃ち、之を破る。

■辛丑（37-26+1=12日）、王世充の隨州（隋の漢東郡）總管の徐毅は州を擧げて降る。

●■〔許紹の安撫策〕癸卯（39-26+1=14日）、峽州刺史の許紹は蕭銑を荊門（荊州にあり、湖北省襄陽道荊門縣、現・荊門市東宝區）鎮に攻め、之を抜く。紹の所部は梁、鄭（峽州は北は鄭の襄州、東は梁の荊門に接す）と鄰接し、二境は紹の士卒を得、皆な之を殺し、紹は二境の士卒を得、皆な資給して之を遣る。敵人は愧感し、復た侵掠せず、境内は以て安し。

●〔蕭銑の兵勢弱まる〕蕭銑は其の齊王の張繡を遣わして長沙を攻め、董景珍は繡に謂って曰く、

「『前年彭越を醢にし、往年韓信を殺す』（漢の高祖が功臣を誅殺した例）、卿は之を見ず乎？何為れぞ相い攻めるや！」

繡は應じず、兵を進めて之を圍む。景珍は圍を潰して走らんと欲し、麾下の殺す所と為る。銑は繡を以て尚書令と為す。繡は功を恃みて驕横なり、銑は又た之を殺す。是に由りて功臣諸將は皆な離心有り、兵勢は益々弱まる。

●〔王世充は竇建德に援軍要請〕王世充は其の兄の子の代王の琬、長孫安世を遣わして竇建德に詣りて報聘し、且つ師を乞わしむ。

突厥■〔突厥の倫特勒を擒とす〕突厥の倫特勒は并州（今年六月に留める）に在り、大いに民の患いを為し、并州總管の劉世讓は策を設けて之を擒とす。上は之を聞き、甚だ喜ぶ。張道源（去年九月に竇建德に捕らえらる）は竇建德に従いて河南に在り、密に人を遣わして長安に詣らしめ、兵を出して洛州（竇建德の都）を攻め以て山東を震わすを請う。丙午（42-26+1=17日）、世讓に詔して行軍總管と為し、兵を將いて土

門（直隸省保定道井陘県井陘山上に故の井陘関あり。土門関ともいう）を出で、洺州に趣か使む。

■己酉（45-26+1=20日）、瓜州（敦煌）刺史の賀拔行威は驃騎將軍の達奚暠を執り、兵を擧げて反す。

【江南・嶺外は各勢力の相攻伐】

● 〔李子通は沈法興の京口を取る〕 是の歳、李子通は江を渡りて沈法興を攻め、京口（揚州延陵県に属す）を取る。法興は其の僕射の蔣元超を遣わして之を拒み、慶亭（毘陵の北）に戦い、元超は敗死し、法興は毘陵を棄て、吳郡に奔る（距離180里）。是に於いて丹楊、毘陵等の郡は皆な子通に降る。子通は法興の府掾の李百薬を以て内史侍郎、國子祭酒と為す。

● 〔杜伏威は丹楊の李子通を撃破〕 杜伏威は行臺の左僕射の輔公祐を遣わして卒數千を將いて子通を攻めしめ、將軍の闕稜、王雄誕を以て副と為す。公祐は江を渡りて丹楊（江寧に治す）を攻め、之に克ち、進みて溧水（溧陽県。開皇命名、丹楊より240里）に屯し、子通は衆數萬を帥いて之を拒む。公祐は精甲千人を簡び、長刀を執り前鋒と為る。又た千人をして其の後を踵が使め、曰く、（11-078p）

「退く者有れば即ち之を斬らん。」

自ら餘衆を帥い、復た其の後に居る。子通は方陳を為り而して前み、公祐の前鋒の千人は殊死して戦い、公祐も復た左右の翼を張り以て之を撃ち、子通は敗走し、公祐は之を逐い、反りて敗る所と為り、還り、壁を閉じて出でず。王雄誕は曰く、

「子通は壁壘無く、又た初めの勝ちに狂れる、其の備え無きに乗りて之を撃てば、破る可き也。」

公祐は従わず。雄誕は其の私屬（親兵、大軍の名籍に在らざる者）數百人を以て夜出でて之を撃ち、風に因りて火を縦ち、子通は大敗し、其の卒數千人は降る。子通は食盡き、江都を棄て、京口を保ち、江西（盧和等の州は皆江西なり）之地は盡く伏威に入り、伏威は徙りて丹楊に居る。

● 〔李子通は沈法興を吳郡に襲い滅亡さす〕 子通は復た東に太湖（江蘇省蘇常道吳県の東南五十里にあり）に走り、亡散を收合し、二萬人を得、沈法興を吳郡に襲い、大いに之を破る。法興は左右數百人を帥いて城を棄てて走り、吳郡の賊帥の聞人遂安（聞人は複姓）は其の將の葉孝辯を遣わして之を迎え、法興は中塗に而して悔い、孝辯を殺して、更に會稽（越州）に向かわんと欲す。孝辯は之を覺り、法興は窘迫し、江に赴きて溺死す。子通の軍勢は復た振い、其の群臣を帥いて徙りて餘杭に都し、盡く法興之地を収め、北は太湖より、南は嶺（五嶺）に至り、東は會稽を包み、西は宣城に距るまで、皆な之を有つ。

● 〔漢陽太守の馮盎は嶺外を定める〕 廣、新二州の賊帥の高法澄、沈寶徹は隋官を殺し、州に據り、林士弘に付き、漢陽太守の馮盎（大業の乱以来嶺南に歸り未だ唐の朝命を受けず、隋官を書す）は撃ちて之を破る。既に而して寶徹の兄の子の智臣は復た兵を新州に聚め、盎は兵を引いて之を撃つ。戦い始めて合い、盎は胃を免ぎて大呼して曰く、

「爾は我を識る乎？」

賊は多く仗を棄て（その祖母の洗夫人以来威令は嶺南に行われる）肉袒し而して拜し、遂に潰え、寶徹、智臣等を擒として、嶺外は遂に定まる。

■寶建徳の行臺尚書令の恆山（恆州）の胡大恩は降を請う。

高祖神堯大聖光孝皇帝中之上武徳四年（辛巳、621年）

■春、正月、癸酉（9+60-55+1=15日）、大恩を以て代州總管と為し、定襄の郡王に封じ、姓の李氏を

賜る。代州の石嶺之北は、**劉武周**之亂より、寇盜は充斥し、**大恩**は従りて雁門（漢の廣武郡を隋は改名、隋唐の代州は皆雁門に治す）に鎮し、討撃し、悉く之を平らぐ。

■ **【稽胡の反乱】**稽胡の酋帥の**劉仝成**は部落は數萬、邊寇を為す。辛巳（17+60-55+1=23日）、太子の**建成**に詔して諸軍を統べて之を討たしむ。

■ **王世充**の梁州（北魏は梁州を浚儀に置き、古の大梁城に因りて州に名付ける・この時浚儀を以て汴州と為す。隋の梁郡は宋城県に治す。宋城は古に睢陽にして漢の梁國、之に都す。北魏以来睢陽を以て梁郡と為す。王世充はこれに梁州を置くべし）總管の**程嘉會**は所部を以て來降す。

■ **【杜伏威は李世民に來會】**杜伏威は其の將の**陳正通**、**徐紹宗**を遣わして精兵二千を帥いて、來たりて秦王の**世民**に會して**王世充**を撃ち、甲申（20+60-55+1=26日）、梁（梁県は伊州に属す、河南省河洛道臨汝県の西四十里、現・汝州市、平頂山市が代わりに管轄）を攻め、之に克つ。（11-079p）

■●丙戌（22+60-55+1=28日）、黔州（隋の黔安郡、古の黔中、現・重慶市彭水県および貴州省務川県・沿河県一帯）刺史の**田世康**は**蕭銑**の五州、四鎮を攻め、皆な之に克つ。

【洛陽で王世充を圧倒】

■ **【李世民は王世充を撃破】**秦王の**世民**は精銳千餘騎を選び、皆な皁衣（黒衣）玄甲し、分けて左右隊と為し、**秦叔寶**、**程知節**、**尉遲敬德**、**翟長孫**をして分けて之を將たらしむ。戦う毎に、**世民**は親ら玄甲を被りて之を帥いて前鋒と為り、機に乗りて進撃し、向かう所摧破せざるは無く、敵人は之を畏れる。行臺僕射の**屈突通**、**贊皇公**（贊皇は趙州に属す。開皇十六年に置く。直隸省保定道贊皇県、現・河北省石家庄市贊皇県）の**竇軌**は兵を將（統は引）いて營屯を按行し、猝に**王世充**と遇い、戦いて利あらず。秦王の**世民**は玄甲を帥いて之を救い、**世充**は大敗し、其の騎將の**葛彥璋**を獲り、俘斬は六千餘人、**世充**は遁げ歸る。

■ **【李孝恭は李靖を軍師とす】**李靖は趙郡王の**孝恭**を説くに**蕭銑**を取る十策を以てす、**孝恭**は之を上る。二月、辛卯（27-25+1=3日）、信州を改めて夔州と為し、**孝恭**を以て總管と為し、大いに舟艦を造り、水戦を習わしむ。**孝恭**の未だ軍旅を更ざるを以て、**靖**を以て行軍總管と為し、**孝恭**の長史を兼ね、委ねるに軍事を以てす。**靖**は**孝恭**に説き悉く巴、蜀の酋長の子弟を召し、才を量りて任を授け、之を左右に置き、外に引擢を示し、實は以て質と為す。

●■ **【王玄應は洛陽兵糧入れに失敗】**王世充の太子の**玄應**は兵數千人を將いて、虎牢より糧を運びて洛陽に入り、秦王の**世民**は將軍の**李君羨**を遣わして邀撃し、大いに之を破り、**玄應**は僅に身を以て免かるる。

■ **【李淵の東都占領方針】**世民は宇文士及をして奏請せしむ、

「進みて東都を圍まん」

と、上は士及に謂って曰く、

「歸りて爾が王に語れ。今洛陽を取るは、兵を息めんと欲する（統は無し）に止まる。城に克つ之日、乘輿法物、圖籍器械は、私家の須いる所の者に非ず、汝に委ねて之を收めしむ。其の餘の子女玉帛は、並びに以て將士に分賜すべし。」

■ **【東都内での激戦】**辛丑（37-25+1=13日）、**世民**は移りて青城宮（東都の城は西に禁苑に連なる、青城宮は禁苑の中に在り）に軍し、壁壘は未だ立たず、**王世充**は衆二萬を帥いて方諸門（禁苑に出る門）より出で、故の馬坊の垣塹に憑り、穀水（穀洛二水は禁苑の中で合す）に臨み以て唐兵を拒み、諸將は皆な懼れる。**世民**は精騎を以て北邙に陳し、魏の**宣武陵**に登り以て之を望み、左右に謂って曰く、

「賊勢は窘なり矣、衆を悉くし而して出で、一戦を徹幸す、今日之を破れば、後に敢えて復た出でざらん矣！」

屈突通に命じて歩卒五千を帥いて水を渡りて之を撃たしめ、通を戒めて曰く、

「兵は交われれば則ち煙を縦つべし。」

煙は作り、世民は騎を引いて南下し、身ずから士卒に先んじ、通と勢いを合わせて力戦す。世民は世充の陳の厚薄を知らんと欲し、精騎數十と之を沖き、直ちに其の背に出で、衆は皆な披靡し、殺傷は甚だ衆し。既に而して限るに長堤を以てし、諸騎と相い失い、將軍の丘行恭は獨り世民に従い、世充の數騎は之を追及し、世民の馬は流矢に中たり而して斃れる。行恭は騎を回して追う者を射、發して中たらざるは無く、追う者は敢えて前まず。乃ち馬を下りて以て世民に授け、行恭は馬前に於いて歩して長刀を執り、距躍（超長距離跳躍）大呼し、數人を斬り、陳を突き而して出で、大軍に入るを得たり。世充も亦た衆を帥いて殊死して戦い、散じ而して復た合う者は數四、辰より午に至り、世充の兵は始めて退く。世民は兵を縦ちて之に乗り、直ちに城下に抵り、(11-080p) 俘斬は七千人、遂に之を圍む。驃騎將軍の段志玄は世充の兵と力戦し、深く入り、馬は倒れ、世充の兵の擒とする所と為り、兩騎は其の髻もどりを夾持し、將に洛水を渡らんとし、志玄は身を踴らし而して奮い、二人は俱に馬から墜ちる。志玄は馳せ歸り、追う者は數百騎、敢えて逼らず。

■ 〔王懷文は王世充を刺せず、天命なり〕 初め、驃騎將軍の王懷文は唐軍の斥侯と為り、世充の獲る所と為り、世充は之を慰悦せんと欲し、引いて左右に置く。壬寅（38-25+1=14日）、世充は右掖門（東都城の南端の三門の中を掖門、左を左掖門、右を右掖門という。洛水は其の前を経て天津・永濟・中橋の三橋有り）を出で、洛水に臨みて陳を為し、懷文は忽ち槩を引いて世充を刺し、世充は衷甲（鎧を隠し着る）し、槩は折れて入る能わず、左右は猝に不意に出でて、皆な愕眙して為す所を知らず。懷文は走りて唐軍に趣き、寫口（洛城中の水はここに於いて寫放して以て其の惡を流す、因りて名付ける）に至り、追ひ獲て、之を殺す。世充は歸り、衷甲を解き去り、袒して群臣に示して曰く、

「懷文は槩を以て我を刺し、卒に傷つける能わず、豈に天の命ずる所に非ず乎！」

■ 〔鄭頊は王世充に誅殺される〕 是より先、御史大夫の鄭頊（李密の臣、世充の獲る所と為る、其の詐り多きを疾む、故に仕えるを樂しまず）は世充に仕えるを樂しまず、多く疾と稱して事に預らず、是に至り世充に謂って曰く、「臣は聞く、佛に金剛不壞の身有りと、陛下は真に是也！臣は實に幸い多く、佛世に生まれるを得たり、願わくは官を棄てて髮を削り沙門と為り、服勤精進し、以て陛下之神武に資せん。」（詭弁して退職を求める）世充は曰く、

「國之大臣、聲望は素より重し、一旦入道すれば、將に物聽を駭かさんとす。兵革休息するを俟ち、當に公の志に従うべし。」

頊は固く請い、許さず。退き其の妻に謂って曰く、

「吾は束髮（幼少總角の時をいう）して官に従い、志は名節を慕す、不幸にして亂世に遭遇し、流離して此に至る、身を猜忌之朝そばだに側て、足を危亡之地に累ね、智力は淺薄にして、以て自ら全くする無し。人生は會かならず當に死有り、早晚は何ぞ殊ならん？姑は吾が好む所に従えば、死するとも亦た憾うらみ無からん！」遂に髮を削りて僧服を被る。世充は之を聞き、大いに怒りて曰く、

「爾は我を以て必ず敗れると為し、苟くも免れんと欲す邪？之を誅さざれば、何を以て衆を制せんや！」遂に頊を市に於いて斬り。頊は言笑自若たり、觀る者は之を壯とす。

■ 詔して王懷文に上柱國、朔州（隋の馬邑郡）刺史を贈る。

■ **[李仲文の誅殺]** 并州の安撫使の唐儉は密に奏す、

「真郷公（県公。西魏は真郷県を置く、綏州に属す）の李仲文は妖僧の志覺と反を謀るの語有り、又た陶氏之女を娶りて桃李之謠に應ぜんとす。可汗に諂事し、甚だ其の意を得、可汗は立てて南面可汗と為すを許す。并州に在るに及び、贓賄狼藉す。」

上は裴寂、陳叔達、蕭瑀に命じて之を雜鞠せしむ。乙巳（41-25+1=17日）、仲文は伏して誅せらる。

■ **[洛陽で世民は優勢]** 庚戌（46-25+1=22日）、王泰は河陽を棄てて走り（去年七月に王世充は王泰に守らせる）、其の將の趙寬等は城を以て來降す。別將軍の雄信、裴孝達は總管の王君廓と洛口に於いて相い持ち、秦王の世民は歩騎五千を帥いて之を援け、轅轅に至り、雄信等は遁げ去り、君廓は追いて之を敗る。

■ 壬子（48-25+1=24日）、延州總管の段德操は劉亾成を撃ち、之を破り、斬首は千餘級。（11-081p）

■ 乙卯（51-25+1=27日）、王世充の懷州刺史の陸善宗は城を以て降る。

■ **[世民は洛陽を攻めめぐね、師を返さず]** 秦王の世民は洛陽の宮城を圍み、城中守禦すること甚だ嚴なり、大砲（續は大礮）の飛石は重さ五十斤、擲^{なげう}ちて二百步、八弓弩（八弓はその一棊なり、古の連弩、後世の划車弩の如し、また其の類なり）箭は車輻の如し、鏃は巨斧の如し、射ては五百步。世民は四面より之を攻め、晝夜息まず、旬餘にして克たず。城中の城を翻さんと欲する者は凡そ十三輩、皆な發するを果たさず而して死す。唐の將士は皆な疲弊して歸るを思い、總管の劉弘基等は師を班すを請う。世民は曰く、

「今大舉し而して來たる、當に一たび勞して永く逸すべし。東方の諸州は已に風を望みて款服し、唯だ洛陽の孤城、勢いは久しく能わず、功成るに垂々とする在り、奈何して之を棄て而して去るや！」

乃ち軍中に下令して曰く、

「洛陽は未だ破らず、師は必ず還らず、敢えて師班さんと言う者は斬る！」

衆は乃ち敢えて復た言わず。上は之を聞き、亦た密に世民に敕して還らせめ、世民は表に、

「洛陽は必ず克つ可し」

と稱し、又た參謀（始めて言葉あり）軍事の封德彝を遣わして朝に入りて面のあたりに形勢を論ぜしむ。德彝は上に言つて曰く、

「世充は地を得ること多しと雖も、率ね皆な羈屬（羈縻して之を属す）なり、號令の行われる所、唯だ洛陽の一城に而して已む、智は盡き力窮まり、克つは朝夕に在り。今若し師を旋せば、賊勢は復た振り、更に相い連接すれば、後に必ず圖り難からん！」

上は乃ち之に従う。世民は世充に書を遣わして、諭じるに禍福を以てす。世充は報ぜず。

● **[沈悅の投降]** 戊午（54-25+1=30日）、王世充の鄭州司兵の沈悅は遣使して左武侯大將軍の李世勣（管城に屯す）に詣りて降を請う。左衛將軍の王群廓（時に洛口に屯す）は兵を引いて虎牢を襲い、悅は内應を為し、遂に之を抜き、其の荊王の行本及び長史の戴胄を獲る。悅は、君理（陳に仕えて僕射となる）之孫也。

● 竇建徳は周橋に克ち、孟海公を虜とす。

令和6年4月24日 翻訳開始 10853文字

令和6年5月6日 翻訳終了 23293文字